

世界紀行文学全集

1

フランス

世界紀行文学全集

1

フランス I

志賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるふ出版

世界紀行文学全集 第一卷
フランスI

監修 志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日 昭和五四年九月一日 発行

発行所 株式会社はるぶ出版

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五四・七〇三一(代)

代表 中森詩人

総発売元 株式会社はるぶ

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五六・六二一一(代)

製作 東京連合印刷株式会社

監修者の一人として

井 上 靖

装いを新たにしてはるぶ版『現代日本紀行文学全集』が出版されたのは、五十一年八月である。その折、監修者の一人として、私は次のような文章を綴っている。

——亡き秋山修道氏は生前、出版会社「修道社」を経営して、二つのいい仕事を遺している。一つは『世界紀行文学全集』であり、一つは『現代日本紀行文学全集』である。ともに、氏が採算を度外視してやった名企画であり、今となってみると、不朽の名出版というものになっている。……秋山修道氏が亡くなったあと、この二つの全集がどのような運命を持つか、いささか心にかかっていたのであるが、こんどほるぶ出版の手によって受け継がれ、新しい装いのもとに出版されることになったのは、たいへん嬉しいことである。……修道社から出版された時は、志賀直哉、佐藤春夫、川端康成三氏が、監修者として名を列ねていたが、三氏とも故人になられているので、ほるぶ版を出すに当って、小林秀雄氏と私が、新たに監修者として加わることになった。

以上のような経緯によって『現代日本紀行文学全集』は出版され、それから三年経った今日、続い

てこんどは、その姉妹篇ともいふべき『世界紀行文学全集』の刊行をみることになったのである。

『世界紀行文学全集』は、単なる海外紀行の集大成といったものではなく、明治、大正、昭和初めにかけての名紀行が選ばれ、今日とは異って、外国旅行がまだ容易に行われ難い時代に、われらの先達たちはいかに海外の風物に接し、いかなる感動を持つたか、——文化史的に見ても、非常に価値の高いものになっている。戦後のものもないではないが、それらは逸することのできない名篇であり、記録的価値あるものばかりである。

今日、日本の若者たちは、世界中、どこへでも出掛けて行く。私などの若い時には夢にも考えられぬことである。が、これは少しも非難すべきことではない。ただ異国の土を踏むには、異国の土を踏む心の姿勢というものがある。旅の初心とでもいふべきものであろうか。いかにその旅の初心というものが大切であるか、『世界紀行文学全集』に収められたどの一篇も、それを語ってくれるだろう。

目 次

西園寺公望
 岩村透
 巖谷小波
 姉崎嘲風
 島村抱月
 戸川秋骨
 杉村楚人冠
 永井荷風
 上田敏
 梅原竜三郎
 高村光太郎
 三宅克己
 津田青楓
 安井會太郎
 津田青楓
 寺田寅彦
 与謝野寛
 晶子
 小杉放庵

パリ回想		三
バルビゾン		四
フランス行		一八
我れやいつこの記		三三
ルイ王家の夢の跡		三四
欧羅巴飛脚記行		三三
パリ日記		四六
西遊日誌抄	 罌 船と車..... 罌	
ちまた	 美 蛇つかひ..... 美	
霧の夜	 六四	秋の
おもかげ	 六六	
モーパサンの石像を拜す		八六
パリより		八六
ルノワルの追憶		九五
パリの祭	 二九	
珈琲店より	 二二	
仏蘭西の春		一一
灰色の巴里		一一
フロモンビールの日記		一七
フランスの山中日記		二三
巴里から(一)	 一四	
巴里から(二)		一四
マルセユ	 一四	
ツウルの二夜	 一四	
巴里の旅窓より	 一四八	
海峽の船		一五
アマアン市	 一五	
巴里にて	 一五	
フランスの田舎		一五九

山 本 鼎
島 崎 藤 村

河 上 肇
正宗得三郎

森田 恒友
吉江 喬松
岡本 綺堂
徳富 蘆花
愛 子

河東碧梧桐
柳田 國男
小出 檜重
橋本 関雪
坂本繁二郎

ブルターニュの手紙……………二七

巴里の旅窓にて……………一七 祭の日……………一五 エトランゼエ……………一六

セエヌ河畔の家々……………一七 暖炉のほとり……………一八 異郷の春……………一八

巴里の五月……………一五 ヴィエヌヌ河の旅情……………一七 戦争の空気に包

まれたる巴里……………一七 オート・ヴィエヌヌの秋……………二〇 ボルドオ

より巴里へ……………二五

巴里最初の印象……………二二

ヴィラ・ファルギエール日記……………二七 ドアルネ紀行……………三六 エト

ルタの海岸……………三三

セザンヌの故郷を訪うの記……………三六

芸術の都……………三九

ランス紀行……………四五

巴里へ……………三五 巴里日記……………三六 巴

里を出でて……………三八

異国風流……………三七

フランスより……………二七

カニユーにて……………二五

巴里より……………二八 マチスを訪ふ……………三五 ルノアールの故居を訪ふ……………三八

巴里通信(A)……………二九 「巴里付近の春」に就いて……………二九 巴里

通信(B)……………二九

矢代 幸雄 太陽を慕う者……………二四
木下 幸太郎 大寺の前の広場……………二六
里日記……………二九
サン・シュルピスの広場から……………二九
巴里より……………三〇
ブルタアニュ……………三〇
エン……………三〇

ゲン湖畔……………三三
花の都……………三四

成瀬 無極 ペイラ・カヴァの思い出……………三八

足立源一郎 巴里滞在記……………三〇

小宮 豊隆 巴里日抄……………三三

石井 柏亭 バリの便所……………三七
牢屋の歌……………三七
入獄から追放まで……………三七

大杉 栄 オウヴェル行……………三九

斎藤 茂吉 フランの下落……………四〇
戦跡二日……………四〇

登張 竹風 仏蘭西人……………四二
巴里の散策……………四二

牧野 英一 マルセーユ……………四三
パリ第一信……………四三
戦後の街頭風景……………四三

辰野 隆 パリジャンの生活……………四四
九月のパリ……………四四
カルチエ・ラタン……………四四

荻須 高德 ……四六
ノルマンディーの春……………四六

岡本 一平 画と文……………四二

巴里二七 モナ・リザ……………一五
巴里の女……………一五
マルメゾン……………一五
ベルサイユ……………一五

トルダムの怪像……………一六
人気ものの墓……………一六
トロカデロ宮殿よりエッフェル塔を望む……………一六
カフェー……………一六

ソオペラ……………一六
ホテルの朝……………一六
モン・ナミ藤田……………一六
魚料理屋……………二〇
巴里の日本美術学生……………二〇
踊り場……………二〇

カバレ・シャノーア 三〇元

執筆者・出典一覧…………… 四三

地 図 フランスとヨーロッパ、パリ近郊、リヨン…………… 卷末(折込)

フ
ラ
ン
ス
I

バリ回想

西園寺 公望

ガムベッタの理想国

余が始めてバリに遊びし頃はガムベッタの声名、其絶頂に達したる時にして、世人の彼を仰ぐこと、嘗に泰山北斗のみならず、余亦た好奇心にかられて、一日親友の紹介を得て彼を訪ふや、四方山の談話の末に、彼れ余に問ふに、日本に於ける新聞紙のことを以てし、余が新聞紙の發行に關しては、日本政府が何等の制限法をも、何等の取締法をも設けざるを語るや、彼れ大に驚きて曰く、果して然るか、日本民風之美、以て知るべきなり、余は一日たりとも如此き国に於て政ごとを為す事を得ば、我願ひ足らん、是れ理想の自由境なるべしと、其後間もなく新聞条例は發布せられ、ガムベッタが理想国は須臾にして消え失せぬ。

アコラス翁の政治家

余が師エミル、アコラス翁は此世紀の半ば頃より、仏国の政治思想界に少からぬ勢力を有し

学問の淵博と云はんよりは、寧ろ識見の透徹を以て知られたる碩儒にして亦一種の慷慨家なり、クレマンソー、フロツケー等の急進党多く其門に出入し、余も亦彼等と翁の家に於て相会したること少からざりき、今は其時代は已に過ぎ去れりと雖も、仏国が余りに武權政治に傾き、若くは政治家が余りに温和に傾くの時は、今後とても反動の勢力は、此流派より復現せんこと少からざるべきか、余が少時バリにあるや多く交遊を主として一事を勉めざるを見て、アコラス翁余に告げて曰く、君が悠遊も又た已に足りしならん、悠遊必しも不可ならずと雖、君門閥一世に秀づ、何ぞ國に歸りて政治を行はざると、余曰く師よ我れ思ふに凡そ政治家たらんと欲するものは常に其思ふ所を云ふ能はず、云ふ所を行ふ能はず、時に虚言を吐き、偽善を行はざるべからず、是れ余の堪ゆる所にあらずと、翁愕然として曰く君が國に於ては政治家は時に虚言をし、時に偽善を行ふて以て足れりとするか、我が仏国の如きは凡そ政治家たる者は時にすら真実を語らざるなりと哄然大笑す、余が翁を辞してより已に二十年、思ふに今日の政治家は二十年前に我が評したるが如くなるか、抑も又アコラス翁が評したるが如くなるか、余は翁の言を思ふごとに、慨然たらざる能はざる也。

邦人某巴黎に胸壁を築く

余のバリ遊学は仏国の近世史中最も多端なる時期に際会し、普仏戦後のコムミヌ党変乱、チエール政府並にガムベッタ盛時等を見たりし

が、コムミヌ党が内亂を起して、一時バリの政權を取るや、余が寄宿したる学校は、其教師多く官軍派たるが為、極めて危険を感じ、武器を穴藏の中に藏くすに至りき、時に官軍ヴェルサイユよりバリに攻寄すると聞くや、コムミヌ党の首領等バリの市民を強迫し、四通八達のは街上の敷石を起して之を積みあげ、若しくは酒樽其他あらゆる障害物を以て、一種の胸壁を作り、之に拠りて敵を防ぐ也、此役激戦數回にして、兵饗の爲めに名区を焼失したるもの少なからず、火絶えざる數日、龍動より消防隊来りて力を貸すに至る、余が師の一人の如きも、コムミヌ党の爲めに銃傷を受けしが、其死に垂んとするや左右を顧みて、余を銃撃したるものは余、明かに之を反撃したるが故に、聊か遺憾なしと語りて瞑目したりき、かゝる危険の地も、余には極めて珍らしければ、同学の士と共に、戦場に出で、見物したること数なりき、一日去る街端にてバリカードの建築、未だ十分ならざるに、官軍已に寄せ来ると聞くや激徒倉皇、邦人駒留某を促して、バリカードの營造に与かしむ、駒留氏がウイ・モツシュ（諸君）と云ふや彼れ喜こびずして曰く何ぞ「モツシュ」（君）の語を除かざると、駒留氏声に応じて改めて曰く「ウイ、シトワイヤン」（諸、市民よ）と、彼悦びて握手し、且つ曰く我友かくてこそ我同志の士なりと。

仏の大統領の贈物を受く

余は此前後激昂したる巴里人が、あらゆる蜚語流言を放つを見て、殆んど吹き出さんばかりに、可笑しく感じたこと少からざりき、当時巴里にてコムウィヌ党の新聞紙、雨後の春草の如くに發生したりしが、其中には時の大統領チエール氏を罵りて、ビスマーク公の賄路を受けて平和条約を締結せりと云ふものあるに至る、抑もチエールは此如き人物にあらざるは論なく、慟哭せんばかりに哀求して、平和を得たるものにして、ビスマークは道に拾へる黄金あるも、之をチエールに呈すべき理由なかりし、去れどかゝる見易き理由も、激徒には見得る能はざるかの如く、讒謔、罵詈雑言にざるなく、甚しきはナポレオン三世の子、実はユウゼフィー后と、羅馬法王との私生児なりと放言するものあるに至る、激昂したる人心があり得べからざる事をも、あり得べきが如くに言ひ、且つ信ずるに至りては東西の別なしと云ふべきか。

日本料理

明治の初、始めて巴里に遊學したるころ、万里の故郷を恋想せるは、日本料理の得がたきに初まる、一日邦人相会して日本料理を手製したりしが、野菜、魚肉は略ぼ調ひ得たるも日本料理の眼目たる、醬油の得がたきに窮し手を分ちて、市中を搜して、漸やくリウドラベールといへる所の商店にて、白瓶に盛りたる醬油を発見したり、当時同人の悦は趙壁を得たるに同じ、日本人、相伝唱して之を得んことを競ひ、遂に一瓶二合入の価三円余に達したりき、是れ徳川氏

の中世より、ヨランダ人が東洋通ひの歸り船に積み込みて、歐洲に輸入したるものなりと云ふ、慶応元年なりしか、曾て徳川民部大輔（今の昭武君）が巴里に使用するヤナポレオン三世、彼を饗応するに、各邦人に対し卓上一瓶づつの保命酒を供したりと、亦是蘭人の輸入に係るものなり、是は昭武君より直接にきゝたる話なり。

如何なる是れ風流

余巴里に遊學せし時、一夕、星旗樓に飲す、先きに一客あり、釵光燭影杯盤狼藉、余は其の光妙寺三郎なるを知れども、未だ親近の人たらざる時なれば、知らぬ様して堂の一隅に座を占めて独酌す、既にして彼の視線は數々余の方に向ひしが、突然起て余の前に來り曰く、如何なる是れ風流と余声に応じて曰く、執拗是れ風流と、余の意、実は諷する処ありしなり、彼れ哄然大笑して余の手を執て曰く、真に知己なり、乞ふ今より交を訂せんと、是れ余が彼と友たるの初めなりき、今を距ること三十年に近し、而して三郎の墓木も亦已に拱す、而して余の意は猶昨日の如し。

（明治三年—十三年）

バルビゾン

岩村 透

(一)

同伴は同じ学校友達のレナードと云う米国人、ガール・ド・リオンの停車場を九時三十分の汽車で出て、ムランの停車場に降りたのが十一時頃。客待の馭者に就て聞けば目的にして居った乗合馬車は、もう出た後で、次の発車は午後の四時、五時間から間がある。ベデカー案内に就てムランの名所を探ぐれば、第一の觀物がノートル・ダムノートル・ダムの寺の寺、ルーベンスの降架の圖の模写もあるとの事であるが、既に本物をアントウェルプで見居れば、大して見度もなし。こんな処に晩方までうろ付よりは一思ひに雇馬車車でバルビゾンへ駆け付けべしと相談一決して停車場前から乗り出した。時は明治二十五年の十二月の中頃天気は珍らしい晴天。少し膚を刺す様なキリッとした空気に面を露らし、窮屈そうに角張った枝先に、風に戦ぐ枯葉二ツ三ツ着けた、並木のシカモアを窓外に見残しながら走る心地の善さ。ムランからバルビゾン迄は小三

里、途中にシャーイーと云う町がある。

(二)

シャーイーの村を外ずれると、広々とした野中に出る。あたりは一面の平地、眼を遮るものは処々に聳そびてくる枯草の山と、淋し気に立つ林檎りんごの樹、仏蘭西の田舎に御定りのブープリエーの樹も今は銀葉を落して活気なく、草薺くさくさを倒さまに立てたに違わず。唯だ威勢の善いものとは路傍に、緑々と茂る牧草と其処此処の畠に飛狂う鴉カラスばかり。西南の方に丘陵相疊かさねって其の間には処々処々に壁を並べたかと思わるる低い農家が群ぐんまって居り。東の方から北へかけては際限見えぬ迄に樹木繁茂して、冬枯の紫色は野中に群がる灰色の農家に面白い背景を作つくって居る。車窓から首を突出して正面を見れば、衝つあたりにも、同じ様な小村があつて、一帯の家統けいどうきは長く森際迄も腕を展ひばして居る。馬車が野中の一筋道を此村の方へ真直に走る処を見れば、此村がバルビゾンであろうと駁者に尋れば、返答は推察に違わず。車内に取とり上げた書物スケッチ本など、俄かに足下の鞆たもとに収め、降り仕度にかつた。

(三)

統計的に云えば、バルビゾンの村はセエヌ・エ・マルン県にあつて、シャーイー郡に属し巴里を去る事南方凡そ十三里、人口四百、戸数八十、田舎風の一本町は東西に延びて、延長凡そ十町、其東端はフォンテヌブロー森に接し

バルビゾンの近傍



て、僅かにして巴里フォンテヌブロー間の大道

に連絡し、シャーイーから南北へバルビゾンを通貫く道は南の方マシラン、アルボンヌの村に通じて居る。街の道路は石を敷詰め、左右に狭き人道を設け、街の両側に殆ど隙間なく住家或は穀倉が立並で居る。家は何れも石造であつて、屋根は赤或は鼠色の瓦。最近の郵便電信局がシャーイー。森を隔て東南の方凡そ二里の処に有名なフォンテヌブローの町を控えて居る。

地理書が旅行案内に云わすれば、唯だこれ丈の、実に取り処の無い一寒村であるが、画かきの眼から観ては、又た別に言わねばならぬ処がある。先ず村に入ってから第一の感は、其淋さ加減一人影は殆ど見えず、道の片隅に鶏四五羽、積上た藁を引掻き廻す音など、藁と藁のすれ合う音まで細かに聴き取れる。これが此国の田舎であれば、何処かにドスンドスンと米舂きの音が、地震前の地響の様に聞えると来る処であるが、仏蘭西の事であれば其音もなし。店とては店らしき家は更に見えず。四辻の壁に張付けた競売の張紙、近郷祭礼の広告など悉く目立って見える。それに村の姿も、大に此寂寞の感を帯もつ。家は大方は平家造り、森から離れた処の両側は壁の部分が多い。今一層街幅を狭くし、道を坂にし、屋根を平かにして、処々に見越しの無花果の樹を出させ、中庭に葡萄棚ぶどうだまでも造らせれば、プロチダあたりの希臘風の町其儘。町幅の狭い処と、家の低い処と、其建方の嚴重な処は、ボム・ペイの古市なぞ想い出させる。一筋道を東の方へ進むと、道に向て窓を開けた家など所々にあり、左方に別荘かとも思われ

る、田舎にしては、目立って立派な家がある。茲がミレ未亡人の住宅と、人は教えて呉れた。森の入口に間近く聳え立つ老樹の枝に、何となく薄暗く感ぜらるる辺りには、二三別荘風の住家がある、美術家の夏家でもあろうか。兎に角、此あたりは一体に都の風にあたった跡が見え、西側のバルビゾンとは稍や趣を異にして居る。併し寂寥は何処も同様、構えの派手な丈に感々閑静な感がされる。

(四)

旅行の大事件は先ず天候だ。名所古跡も天候に棄られては仕方がない。月のヴェニスが曇天と来、青空のローマが雨、南のナポリが雪と来ては旅の金箔は剥けて仕舞う。併し又た、一方から云えば、如何な天候も宿屋次第、硝子戸を打つ雨音を聞きながら、威勢善く燃上る炉を囲んで、道伴れと世間囃、ありとあらゆる罪亡しも氣持好し。若亦た独り旅とあれば、宿屋の主人を相手に、土地の雑談も興がある。坊主憎けりや袈裟まで憎い——土地の印象は先ず宿屋次第と云うて間違はあるまい。バルビゾンで、我々の行た宿は随分質素な家であった。入口は普通の農家で、這入と広々とした中庭がある。片隅は穀倉、右側は母家、納家に働いて居た主婦は、子供を抱きながら、笑顔して、つき当りの客間に案内して呉れた。客間と云っても、名ばかりの客間、片側に二階の上り口を付け、六角の煉瓦で敷詰た清潔な床に、白木のテーブルを据え、上には白ッポイ油布が懸けてある。其向う

に昔風の炉がきつてあって、窓は大きなのが左右に二つ、装飾と云ては、金箔の剝た例の置時計と、鍵盤の磨滅した古るピアノが一台。壁は例の通り額縁で仕切て、画かきの楽書が一面に張てある。

場処によつては、随分不平な宿屋であったかも知れぬが、素と素と田舎、素朴な農家を連想して居るバルビゾンでは、此上もない理想の宿だ。眼に衝るものは皆愉快の種。あれも雅致がある、これも面白い。殊に夕飯の献立、馬鈴薯のソップに、狐色のオムレツ、小牛の冷肉に、兎のソーテ、果物が梨子に葡萄、馨い黒カヒーで暮と来ては、不平も何もあつたものでない。米友と仏蘭西万歳を三呼した。

さて一運動と外へ出れば、秋の日の短さに、太陽は早や森の後に沈んで、向の寺の塔、サフラン色の夕空に對して、影黒く三角を描き、そこ、ここに立つブリーニエも、今は、かすかに立昇る烟と差別なく、アンジェラスの晚鐘は、澄みきつた空氣に響き渡り、千哩も聞えるかと思われる。街は早や薄暗い。畠から歸る百姓、牛を曳く農婦、乳を運ぶ小娘——どれとしてミレを想わせぬものは無い。

ミレの旧家は森へ向て、通りの右側にあって、壁は直ぐに街に沿て立ち、確か塀の上から、ライラックの大きなのが、出て居たと思う。画室であつたと云う棟の窓は閉まって、見えぬが、住家の方の窓は開いて居た。竹の暖簾越しに、恐る恐る中の様子を覗くと、老人が唯独り、ポロポロと燃上る炉辺に黙坐して居る。部

屋は暗く、唯だ壁に懸る額縁が炉火を受る度に、時々金線を引くばかり。寂寞無限。ミレは先ず此の様な家に居たのであらう。

ミレの家を過ぎて左側にシロンの宿屋がある。宿屋の先は直ぐ森で、幾百年の老樹は肩を揃え枝を交えて立並び、雑木は押合う蔭の枯葉を衝いて生い茂て居る。森へ出て、右手の小径を登ると、小高い処に、ミレ、ルーソーの記念碑が立て居る。碑は日本風に、有合せの天然石を彫り画家兩人の肖像を嵌め込んだ、西洋にしては、珍らしい、至極風流な記念碑だ。周囲に威かめしい鉄柵のあるではなし、業々しい碑文のあるでもなし、唯一株の櫟の木が背後から枝を延して居る斗り。其無邪気さは、能く其人格を表して居る。

(五)

面かきがバルビゾンと聞て必らずミレを想い出すのは、例えばマドリッドと聞てヴェラスケスを想い、ヴェニスと聞てチンアンを想い出すと同じく、離れ難き連想である。処でバルビゾンの一寒村を発見して、世にも有名な美術家の住地としたものは、ミレが初てやったのであるとの考が浮ぶかも知れぬが、これは決して左様でなく、ミレが騒々しい悪魔の巢窟と思つたバルビゾンは画家の別天地となつて居たのである。画家の連中が此地を発見した事に就ては、種々と話があるが、ジュとアリニーの來たのが最も初と云うてよからう。彼等のバルビゾン探

検談が斯うである。今から殆ど八十年程前、一千八百二十四年の夏の初に、フィリップ・ル・ジュとクロード・アリニー（コロを羅馬で養め囃したの有名な例のアリニー）と云う巴里在住の画家が、当時フォンテヌブローの陶器製造処の長をして居った、これも同じ画家の友人ジャコップ・ブチーの許へ遊びにやって来た。其時の事、ある日三人連れだつて画料発見の爲と森林の探検に出かけた。彼処此処と森を彷徨し、目新しいと、待設けぬ材料の夥多しに釣られて、それから、それと追い暮し、さて歸りと足を返せば、どうしても路は分らず、いくら歩ても森から出ない。全く道を失うた事と断念した時には、早や太陽が樹の背に沈む頃であつた。腹は減る、足は疲れる、途方にくれて、愈々何処か岩窟に野宿と決心して、さて場所の撰定にかかろうとすると、遠方に不思議な音が聞える。須臾して、又た其音を聞き付けた。一同は希望を抱いて其音の来た方へ進むと、流石老練の狩猟家丈に、其音を角笛と鑑定したのがジュ。聴て鈴の音が聞える。三人は力を得て、殆んど通れもせぬ林中を無理無体に潜り抜けて、漸々の事に牛を呼集めて居る牛飼に出会つた。画かき共は「やれ、これで森を出られる」と悦ぶに引かえて樵夫、薪拾いの外か誰も見慣れぬ山中に、突然異様な風体の男を見た牛飼は怪訝な顔。先ず場所を尋れば「茲はアブルモンの峽間、フォンテヌブローの市から二里半」と云う。「とても今夜は歸る事は出来ぬ、何処か近辺に、何か喰わせ、泊らせて呉れる処

がある」と閉口して尋ると、牛飼の返答に「茲から半道計かりの処に、バルビゾンと云う村があり、僅か斗りの農家もあれば、其処へ往けば、麵麴、と酒はあるが、併し泊れる処は知らん」と云う。「バルビゾン！ バー！ バー

フォンテヌブローの森



バルビゾンとは強く野蠻だ。危ぶないものだが御前が道を教えて呉れるなれば、兎に角往つて見よう」と牛飼を真先に、首へ鈴を付けた四十五十四の牛を道伴れにガランガランの音に牽かれて怪しい村指して出掛けた。

(六)

当時バルビゾン村にフランソア・ガンヌと云う、未だ年青い仕立職が居つた。住居は前後二た間ぎり後は寝間、前には些々かな酒店を出して、店番は妻の役、村の者を相手に、僅か斗りの商売を営んで居つた。此のガンヌはバルビゾン生れの者にしては中々の野心家で、少壮の頃から巴里へ出かけて職を覚え、七年の後に故郷へ歸つて、近郷から立派な女房を迎えて酒店を出した男。後にはバルビゾン画派に關連して画かきの間に誰知らぬ者の無い有名な男となつた。

牛飼は此夜三人の画かき共を此のガンヌの酒店へ連れて来た。処が仕立職の驚きは牛飼どころの話ではない。見れば、何れも口髭を茫々と生やして、訳の分らぬ不思議な着物を着て居る。風体は如何にも怪しい。例の山賊かも知れぬ、氣を付けると、画かきの云う事などを聴き入れればこそ。様々と哀訴の末に漸々喰わして呉れたのが卵子焼一皿。唯だ食事の事でさへ此次第。泊めて呉れと言ひ出した時のビックリさ加減、夫婦口を添えジダンダ踏で、以ての外と拒絶した。「併し何処かに寝ねばならぬ、如何な場所でも苦しゅうない」と如何程歎願しても、止むを得ず又々以前の牛飼を探ね出して、牛小屋の一隅を借り受け、其夜は一同牛と一緒に藁の中に寝た。

翌朝再びガンヌの店に卵子焼に腹を直し、バ